



Title	憑霊現象・治療儀礼・物語 : 中央カロリン諸島の シャーマニズム
Author(s)	小松, 和彦
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1993, 27, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56486">https://hdl.handle.net/11094/56486</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 憑霊現象・治療儀礼・物語

——中央カロリン諸島のシャーマニズム——

小 松 和 彦

## 一 はじめに

十年ほど前から、マイクロネシア・中央カロリン諸島のボンナップで民俗調査を行なっている。紙面が限られたこの小文では、このボンナップで得られた「ワーニヤニュー」ないし「ホウヨンゴル」と呼ばれるシャーマンに相当する宗教的専門家の活動について簡単に報告をした上で、同じカロリン諸島のサタワルで調査を行なった土方久功の戦前の報告を再検討する。さらに、そうした考察を通じて、カロリン諸島のシャーマニズムの概観を掴み、合わせて日本の宗教者との比較の可能性を探ってみた。

1  
マイクロネシアは、現在、いくつかの国に分かれているが、私が調査しているボンナップはマイクロネシア連邦のチューク州に属している。チュークという名称は、外国人には聞き慣れない言葉であるが、日本人には台風の発生地域として知られるトラック諸島の現地名である。このチュークという語は「山」を意味している。チューク州の行政

府があるモエン島を含むトラック・ラグーンは、大昔の火山の火口にあたっている。このため、隆起珊瑚礁でできた、平坦な小さなファヌー・ピー（砂の島）と呼ばれる島とは違った、起伏のある地形の島々から構成されているので、このような呼称で呼ばれることになったのである。

私の調査地のボンナップは、後者のファヌー・ピーと呼ばれる島で、東京から名古屋ほど離れているトラック諸島の離島のボンナップ環礁を構成する三つの島の一つである。ボンナップについても、アメリカ人はブラップと発音しているが、島民の発音はボンラップないしはボンナップ（トラック地域ではi音とr音の区別がはっきりしない）が正しい。私はボンナップと記述しているが、日本の地図や論文などではブラップとかブンナップと記述しているものがある。島名の「ボンナップ」は、「偉大な船長」という意味で、これは、この島が中央カロリン諸島に伝承されてきたカヌー航海術の二大流派の一つ「オリエン派」の発祥の地とされていることよって。キリスト教に改宗するまでは、島の東南にオリエン派の伝説上の始祖オリエンの神殿が設けられていたというが、わずかに村名にオリエンの名を残すだけで、現在ではその痕跡さえうかがうことができない。

ボンナップの人口は島外にいる人も含めて約七百人、島には約五百人が住んでいる。生業は農業と漁業で、主食は、島で栽培しているタロイモと半栽培のパンの実、そして購入した米である。社会生活の基礎になる集団は、「アイナン」という外婚規則を伴った母系出自集団で、この島には六つの母系出自集団があり、それぞれ一つないしいくつかの集団に分かれて日常生活を送っている。ボンナップのワーンヤニューは、一九四七年にボンナップ島民全員がカトリックに改宗したときに姿を消し、改宗以前にワーンヤニューであった者たちも私が調査に入ったときにはすべて亡くなっていた。したがって、このワーンヤニューについての情報は、若いときに彼らの活動を目に

した古老たちの記憶を呼び起こしてもらおうことで得られたものである。

## 二 「ワーンヤニュー」について

ボンナップの一九四七年以前の生活と文化を復元するのが、私の調査の主要な課題で、古老たちから幼かった頃の改宗以前の生活を思い出ししてもらったり、改宗以前から語られていた伝説や昔話を語ってもらい、そこに描き込まれた習俗・習慣から昔の生活を思い出ししてもらったりすることで、そうした復元作業を行なってきた。幸いなことに、伝統的宗教儀礼は捨てたが、たくさんの神話的伝承や昔話は語り継がれていた。島民の改宗以前の伝承の記憶までも抹殺することは宣教師にもできなかったわけである。成人儀礼や葬送儀礼などの様子を詳しく語り込んでいる昔話を採集し、オロファットと呼ばれるトリックスター説話もいくつか採集した。こうした説話のなかに「ワーンヤニュー」と呼ばれる宗教者を語り込んだ説話も見いだすことができるわけである。しかし、問題は、ワーンヤニューという呼称では、ワーンヤニューが昔話に登場してこないということなのである。そこには、説話的形象への変換がなされていたのである。ここでは、そのあたりのことを探ってみるつもりである。

「ワー・ン・ヤニュー」という語は「カヌー」を意味する「ワー」と「神」を意味する「ヤニュー」の合成語で、言葉通りに解すると「神の乗り物」といった意味の語になる。実際、ワーンヤニューは、この言葉からもわかるように、自分の肉体を神が降りて来るいわゆる「よりしろ」にする宗教者、つまり神が乗り移る宗教者のことで、これは人類学という憑霊型のシャーマンに当たる。古老が幼い頃の記憶をたどって語ってくれたところによると、ワーンヤニューは普通の人とは違って、そばを通ったとき、ハーハーと荒い息をしていたとか、突然大きな奇声を発

したとか、「ホーマ（妖怪、幽霊）が来る、ホーマがどこそこに来ている」と周囲の人に警告したり、病気になるた人のところにいってホーマよけの呪文を唱えたり呪薬（ハフエイ）を施したりしていたという。また、神懸かったワーンヤニューは、歌を歌い、踊り狂ったともいい、そうした巫歌や踊りの一部が島民の娯楽（伝統的文化）として今日まで伝えられている。

ワーンヤニューにはどのような神が乗り移ったのだろうか。いろいろの神が乗り移ったらしいが、私の聞いた範囲では、若くして亡くなった夫や妻、子供など近い親族が乗り移ることが多かったようである。この理由は、死者の靈魂がこの世に未練を残しているからで、ワーンヤニューになる契機はそうした近親者を亡くしたあとであることが多い。これは、近親者を亡くした者がそのショックからワーンヤニューになって、その近親者の靈を呼び招くことになった、と理解することもできるだろう。

ところで、実際の生活のなかでワーンヤニューがどのような活動をしていたのかをいろいろと調べてみたが、断片的な資料しか集めることができなかった。そこで、ワーンヤニューが登場する昔話がないかを調べてみたのであるが、奇妙なことにも、昔話も長い間採集することができなかったのである。やがてその理由が明らかになってきた。というのは、ワーンヤニューという呼び方は神懸かりの属性を強調した時の呼び方であって、同じ宗教者であっても、別の属性を強調するときには別の呼び方をしていたのである。「ホウヨンゴル」という呼び方もその一つであった。ホウヨンゴルとは、「ホウ」は「人」、「ヨー」は「捜す」、「ンゴル」は「靈魂」を意味するので、「魂を捜す人」という意味になる。このホウヨンゴルについての伝承を調査しているときに、幸いなことに、ポナンナップ社会におけるワーンヤニューはホウヨンゴルの基本的性格を把握することができるような、以下に紹介

する伝説が浮かび上がってきたのであった。

### 三 「ホウヨーンゴル」と病氣観

ボンナップでは、島の土地は大きく「里」(「モホール」)と「森」(「レワル」)に分けられ、タロ辛の畑も「森」に属している。この「森」は、現在でも島民には妖怪たちの出没する所として恐れられている。

ドイツ時代から日本時代にかけての人に、島の首長にもなったイケラムという名の男がいた。彼はワーンヤニューでありホウヨーンゴルであった。このイケラムについて、次のような話が、実際にあった話として伝えられている。

ある日の夕方、タロ辛の畑で仕事をしていたイケラムの妻が、タロ辛の葉の陰に変なものが横切ったのを見た、急に気分が悪くなったので仕事をさっさと切り上げて家に戻ったが、その日から重たい病氣になった。そこでイケラムが神懸かって占ったところ、妻が見たものはホーマで、そのホーマが妻の魂を食べてしまったので病氣になっている、ということがわかった。神懸かったときのこのワーンヤニューの様子は、いわゆるトランスの状態は起きずに、誰かとぶつぶつと話し合っているように見えた、といった程度の神懸かりであったという。話し相手つまり憑依した霊は、若くして死んだイケラムの息子の霊だった。

妻の病氣の原因をつきとめたイケラムは、ヤシの殻に呪薬を入れ、ホーマが出た畑に出かけ、タロ辛の葉の陰に隠れていると、同じ場所にホーマが現れた。そこで、そのホーマの後ろに回って首を捕まえ、思いきり締め上げて、食べられてしまった妻の魂を吐き出させた。そして、そのホーマを、持っていた呪薬の入ったヤシの殻のなかに

封じ込めてしまったという。吐き出された妻の魂が病気の体に再び呼び戻されたので、だんだん妻の病気も良くなり、ほどなくして元気になった。このような事件があったので、妻の名前をもっとはウイレムといったが、それ以後は「ハウレン」つまり「天に上がった人」という名前に改名したという。

この事例は多くのことを語っている。シャーマニズムの観点からみると、この島では、ある種の病気はホーマによって魂が奪い去られ（食べられ）てしまうために生じ、シャーマンは病気の原因を神懸かりで占い、その奪われた魂をホーマと戦って奪い返してくる宗教者だということがわかる。つまりワーンヤニューとかホウヨンゴルとか呼ばれる宗教者は、「巫者」であり「占い師」であり「呪医」であるという多様な属性を帯びた存在であったわけである。

ポンナップのシャーマニズムは、トランスを伴わない憑霊とトランスを伴った憑霊の二つのタイプがあり、トランスを伴わない憑霊の方が多いようであるが、いずれも神が乗り移るといふ点では、憑霊型のシャーマニズムに相当するということができる。だが、注意したいのは、病人の魂がホーマに奪い取られる病気になるといふ点では、脱魂型の特徴を示していることである。イケラムはその妻の魂を奪い返すためにタロ芋の畑に出かけたと言われているが、実際にそうしたのか、肉体は家にあつて彼の魂だけを畑に飛ばしたのははっきりしていない。しかし、そのいずれであったせよ、ポンナップでは、病気は悪霊が乗り移ることで生じるのではなく、悪霊に魂を奪い去られることで生じると考えているのである。この観念はキリスト教に改宗した現在でも生きており、悪霊に魂を取られないようにする呪薬とくに子供用の呪薬がしきりに作られている。

## 四 サタワルのシャーマニズム

サタワル島は、ボンナップ環礁の西方に位置する、ボンナップに比較的近い島である。サタワル島のシャーマンについては、日本統治時代に七年間もこの島に滞在した土方久功の貴重な報告があるので、これを紹介しながら、もう少しシャーマンの具体的なイメージをつかむことにしよう。

サタワルのシャーマニズムもボンナップのシャーマニズムとほとんど同じである。サタワルでは、シャーマンのことを「神」を意味する「ヤニュー」という。ボンナップでも、ワーンヤニューを「ヤニュー」ともいうので、サタワルにも「ワーンヤニュー」という呼称もあったと考えられる。というのは、戦後まもなく、サタワルよりもさらに西方に位置するイファリユーク島で調査を行ったアメリカの人類学者、バロウズとスパイロの報告によると、この島でも、シャーマンのことを「神のカヌー」を意味する「ワー・ニ・アヌ」と呼んでいるからである。中央カロリン諸島では、おおむね同様の呼び方がなされていたものと推測されるのである。

サタワルのシャーマンの神懸かりは、二つのタイプがあり、一つは突然シャーマンに神が降りて来て、人びとがそのことに気づいて周囲に集まり、託宣を聞くというものであり、もう一つは人間の側が神を呼び招くというタイプで、このような神懸かりでは神懸かりの状態にするために、人びとがシャーマンを囲んで神寄せ歌を静かに歌い、やがてシャーマンが入眠状態におちいって倒れ伏し、急に起き上がった託宣などをして、また倒れ伏して、目覚めるときは通常の意識に戻っているという。後者の神懸かりのための作法は日本の「地藏憑け」などを想起させる。

シャーマンに降りて来る特定の神は、シャーマンの近親者で若くして死んだ者の霊であるというから、これもボ



ンナップと同じである。土方が滞在していたとき、サタワルには二人の女性シャーマンがいて、そのうちの一人であるイネニユプマヌの神は、彼女の幼くして亡くなった二人の実子（ナリユヌとレリユクメタオ）の靈魂であった。日本では、こうした惜しまれて死んだ子供の霊がシャーマンの憑依霊になることはほとんどないといっている。そのようなことがあるとすれば、好ましくない死霊憑きとみなされることになる。

ところで、土方は、昭和七年に、次のようなシャーマンの病氣治療を目撃している。この記録は、すでに紹介したポンナップのイケラムの病氣治療の事例ととてもよく似ている話である。病人は十歳足らずのイブマリーという名の男の子供であった。二年ほど前にも病氣になったが、女性シャーマンのイネニユプマヌが、彼女の神であるナリユヌから教えられた薬（サフェイ）を与えて治った。この病氣はヤニュー・サット（海の悪神）によってもたらされた。土方はこれを「ヤニュー・サット（海の悪神）」が、イブマリーに憑いたからである」と記述している。日本人にはわかりやすいが、「憑く」と表現するのは適切ではない。なぜなら、ヤニュー・サットは少年に乗り移って病氣にしたのではなく、子供の靈魂を奪い取って病氣にしたと考えられるからである。

こうしたことがあって病氣もすっかり良くなった子供が、父たちと一緒に海に出た。子供は尻尾のない頭だけの海老を捕まえたが、不吉に思っただけを海に捨てて戻ってきた。そしてまた子供が病氣になったのである。

やがて、ナリユヌの霊がイネニユプマヌのところにやってきた。つまり降神してきたわけである。ナリユヌの霊が「一人の女（海の悪神の女）」のところで一人の子供を見かけたが、誰か病氣の子供がいなか」と尋ねた。「イブマリーが病氣です」と答えると、「行って良く世話をしなさい」と言う。そこで、イネニユプマヌは子供のところに行って世話をした。

興味深いのはここからあとの記述である。イブマーイの魂を奪い取ったヤニュー・サットは、ナリユヌの霊が目を離れた隙に、その魂を海の深みの岩穴に隠してしまったのである。ナリユヌの霊があらちちらを捜して、ようやく「岩穴の中に入れていたので、また連れ帰って、サフェイを与えた（イネニユプマヌを通じて）」という。注目したいのは、奪い去られた子供の魂を捜し求め、発見し、そして連れ帰って来るのが、シャーマンのイネニユプマヌではなく、彼女の神のナリユヌの霊だということである。イネニユプマヌは、ナリユヌの霊が子供の肉体に魂を連れ戻してくれたあと、子供に薬を飲ませているだけなのである。すなわち、ここには「人間の世界」で起きていることと、それに関係している人間には見えない「神霊の世界」の二つの世界が同時に語られているのである。

ところで、子供の病気はこれで治らなかつたのだ。子供が海で水浴びしていたとき、また女のヤニュー・サットが来て、子供の魂を掴み取っていったのである。この時は、ナリユヌの霊はヤニュー・サットたちのところ、つまり神霊たちの世界にいたので、すぐにわかつた。彼らは長いこと座っていたが、ナリユヌが皆に「もう寝ようではないか」と言い、皆が寝込んだときに、子供（の魂）を脇に抱いているヤニュー・サットからそっと子供を取って、連れ戻ってきた。そして、当分の間は、水浴びであっても、海に出さないように、と親たちに命じたのである。こうして、イブマーイという子供の病気は治つたのであつた。

この病気治療の話を参照しつつ、ポンナップのイケラムの病気治療の話を再解釈すると、イケラムが妻の魂を捜しにいったという話は、実はイケラムに乗り移る神がイケラムの妻の魂を捜しにいったのではないかとも思われてくる。すなわち、現実の世界で行われたイケラムの神懸かりを含む病気治療儀礼と、神懸かりを通じてあるいはイケラムの想像を通じて語られた「神霊の世界」の出来事とが複合して、一つの物語に織り直されているのかもしれない。

ないのである。逆にいうと、サタワルのイネニユプマヌの病氣治療の物語は、ナリユヌの霊の病人の霊魂捜しではなく、イネニユプマヌ自身の魂が「神霊の世界」に赴き、子供の霊魂を捜し出す物語に作り変えることもできるわけである。

##### 五 ポンナップの「片側神霊・片側人間」（ヤニューヤラマ）

ところで、昔話のなかにはワーンヤニューとかホウヨーンゴルという名称では登場しない。しかし、実生活のなかのワーンヤニューとかホウヨーンゴルとか呼ばれる人物に相当する者として昔話にしばしば登場するのは、「ヤニューヤラマ」という存在である。ワーンヤニューやホウヨーンゴルのことを、ポンナップの人たちはヤニューヤラマみたいな人である、と説明したりすることからもそのことがわかる。「ヤニュー」は「神」（ホーマのような悪い霊も含む）、「ヤラマ」は「人間」という意味するので、「神であり人間である者」、つまり「半神半人」的属性を持った存在を意味している。さらに興味深いことは、このヤニューヤラマの姿かたちは、体の右半分が人間で左半分が神（妖怪）の姿をしている、と説明されることである。ヤニューヤラマとは神と人間の中間・境界に位置する存在、神であり人間である存在なのである。しかも、ヤニューヤラマは人間界にいるときは人間の姿をしていて、神の世界にいるときは神の姿をしているとされ、そのときの状況に応じて人間の側に立って行動したり、神の側に立って行動したりするとされている。実際、昔話に登場するヤニューヤラマの多くは、神の世界に住んでいる場合でも、良い神ではなく悪い神（ホーマ）たちに混じっていたり、ホーマが出没する森や無人島に住んでいると語られる。人間の世界に住んでいる場合は、人里の周辺部の一軒家とか大きなパンの木の穴などに住んでいると語

られる。

ワーンヤニュー（ホウヨーンゴル）に対応するヤニューヤラマは、人間界に住んでいる場合のヤニューヤラマで、たとえば、こんな昔話がある。

村のはずれのバンの木の洞に、ヤニューヤラマが住んでいた。ホーマがねらいをつけた人間を捕まえて食べようとい追いかけてきた。気づいた人間が一生懸命逃げ、もう少しで捕まりそうになったとき、大きな木の枝をくぐったところ、その枝にホーマがぶつかって痛がっているすきに、遠くに逃げたがさらに追ってきた。また捕まりそうになったが、今度は大きな木の根が地面から出ていたのでそれを飛び越えて逃げたところ、ホーマはその根に蹴つまづいてひっくり返ったので、そのすきに遠くに逃げた。こうして村はずれまでようやくたどり着いてヤニューヤラマの住む木の前まで来た。いち早くそれに気づいたヤニューヤラマは、逃げ帰った者を洞に招き入れ待っていると、ホーマがやって来た。ホーマが洞に首を差し込んで来たので、その首をひっつかまえ締め上げたところ、ホーマは悲鳴を上げて降参した。見るとそのホーマは女のホーマだったので、「おれの妻になれ。なれば命は取らない」といって妻にしてしまった。

ヤニューヤラマはサタワルの昔話にも登場し、その属性はボンナップのそれと変わるところがない。「人間の世界」にも周縁的であるが確固たる位置を占め、「神霊の世界」でもやはり十分な成員権を持っている、こうしたヤニューヤラマのイメージにもっとも近いのは、サタワルのシャーマンであったイネニユブマヌの分身であるナリユヌの霊の活動であろう。

すなわち、シャーマンに奉仕する「神」がヤニューヤラマの原像なのではなからうか。ヤニューヤラマ昔話・伝

説群の生成の背後には、シャーマンの「神」の活躍の物語があり、その背後のはシャーマンの現実の世界での活動があったのではなからうか。

こうした仮説に基づいて、シャーマニズムの關係した伝説や昔話の採集や分析をさらに進めてみようと思つてゐる。

## 六 日本のシャーマニズムとの比較

ここで、ポンナップのシャーマニズムを、日本のシャーマニズムと比較してみよう。周知のように、日本のシャーマニズムも憑霊型だとされている。確かにその通りで、宗教者自身や彼らが用意した「よりました」（霊媒）に神靈が乗り移つて託宣をするつまり占いをする事例は、枚挙のいとまがないほどである。この点では、ポンナップと日本のシャーマンは類似しているといつていいだろう。しかし、神懸かるだけでは病気を治すことができない。ポンナップのワーンヤニューがハウヨンゴルでもあったように、日本の宗教者の多くも、自分自身であるいはその分身である「使役神」を用いて、悪霊と戦い、それを追放したり退治したりすることで、病人の病気をなおす「呪医」であった。

しかしながら、決定的な違いが見いだされる。中央カロリン諸島のシャーマン呪医が、悪霊によって病人の肉体から奪われた魂を捜す宗教者であるのに対し、日本では病氣もまた悪霊が人に乗り移ることで生じると考えていたことである。日本の宗教者は病人に乗り移っている悪霊と戦う宗教者なのである。密教系の験者や修験者、陰陽道の陰陽師などはまさしくそうした宗教者であった。この点が、ポンナップのシャーマニズムと日本のシャーマニ

ズムとの大きな違いであった。この違いを見落とすと、中央カロリン諸島の文化の解説をも過ってしまふであろう。

## 七 おわりに

ここで述べたことは、日本のシャーマニズムと悪霊の関係を考察してきた成果の延長上に発想された、私の試論に過ぎない。ミクロネシアのシャーマニズム研究はきわめて低調であり、参照すべき研究書はもとより、報告すら断片的で少ないように思われる。しかし、カロリン諸島の伝統文化の形成において果たした役割は想像以上に大きいものがある。それを明らかにするために、こうした覚書きを作成しておくのも無駄ではないであろう。

なお、このささやかな試論を作成するに当たっても、多くの文献を参照したが、紙面の都合で、本文中に引用・言及した文献のみを左に挙げることに留める。

### 参考文献

土方久功『土方久功著作集』第四巻 一九九二年 三一書房。

Burrows, Edwin G., and Melford E. Spiro, 1953. *An Atoll Culture: Ethnography of Ijaluk in Central Carolines.*  
Human Relations Area Files.

(文学部助教授)